

野宿生活者に関する研究内容の分析と今後の課題 —2001年から2015年の国内文献調査から女性野宿生活者に着目して—

島田 友子*, 白井 裕子**, 吉岡 萌***,
佐々木裕子****, 井上 清美*****, 稲垣 絹代*****

Analysis of the details of research about the camping
out people and the future subject
Its attention is paid to the female camping out people from
investigation of the domestic literature in 2001 to 2015.

Tomoko SHIMDA*, Hiroko SHIRAI**, Moe YOSHIOKA***,
Yuko SASAKI****, Kiyomi INOUE*****, Kinuyo INAGAKI*****

要 旨

本研究は、実際に行われている野宿生活者への支援について文献検討を行い、支援の現状と課題を明らかにすることを目的とした。特に、野宿生活者のうち、女性野宿生活者に関する研究内容の分析と、今後の課題を国内の文献から検討した。医学中央雑誌Web版Ver. 5を用いて、2001-2015年3月までの文献検索を行い、22編を分析対象とした。その結果、課題として「背景に潜む暴力」、「親との関係性の希薄」、「母児の周産期事象に関する課題」に分類された。

思春期から青年期は、近い将来親になるための発達段階として、「親性」を獲得するための働きかけを行うには大切な時期であると考えられる。また、暴力による関係性に依存しないためにも、この時期への教育支援の必要性が示唆された。

キーワード：野宿生活者、ホームレス、ネットカフェ、女性、親準備性

Abstract

This research does document consideration about support to the camping out people performed actually, we had the current state of the support and the thing which does the exercise clearly for my object. In particular, an analysis of the study contents about among the camping out people and a female camping out people and future's problem were considered from a domestic document.

Document retrieval from 2001 until March, 2015 is performed from using a medical central magazine web edition Ver.5, we made 22 pieces the analysis subject.

As a result, it was classified into "Understanding of an escape from the violence which lies

* 名桜大学人間健康学部助産学専攻科 〒905-8585 沖縄県名護市為又1220-1 Meio University Faculty of Human Health Sciences Department of Nursing 1220-1 Biimata, Nago City, Okinawa Japan 905-8585

** 愛知医科大学看護学部看護学科

*** 名桜大学人間健康学部看護学科

**** 愛知医科大学看護学部看護学科

***** 神戸常盤大学健康科学部

***** 元名桜大学人間健康学部看護学科

in a background", "Weakness of the relationship with a parent", "Problem about mother and child's perinatal period phenomenon" as a problem. We think adolescence from pubescence is important time to do the approach to get "parenthood" as the development stage to become a parent the near future. And necessity of educational support was suggested to this time in order not to depend on relationship by violence.

Keywords: camping out people, homeless, net cafe, woman, readiness for parenthood

I. はじめに

地域には、安定生活者と同じように、少数ではあるが不安定な就労・居住状態にある「野宿生活者」が生活している（鈴木，2005）。

日本における野宿生活者は、年々減少傾向にある。ホームレスの実態に関する全国調査によると（厚生労働省，2018），全国で4,977人という数が報告されている。2007年の報告では，18,564人という数が報告されており，野宿生活者数は，10年前と比較して著しく減少傾向を示している。野宿生活者数が年々減少傾向にあることについて，厚生労働省は，2002年に制定された「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」（以下，特措法と記す）による各自治体でのホームレス対策が進んだことや，移動型のホームレスの人々が増え，調査不能の人々が増加したことなどを理由に挙げている。ただし，統計上の野宿生活者数の減少は，不安定な就労・居住という問題の解決に直結しているわけではない点は指摘されている（北川，2010）。

女性野宿者の数は，野宿生活者全体の3.0～4.5%（厚生労働省，2018年は177人，3.6%）で，減少傾向を示しながら推移している（図1）。特措法に基づいた「ホームレスの自立の支援等に関する基本方針」（2003年）には，女性野宿者への対策として，性差を配慮したきめ細かな自立支援を行うとともに，必要に応じて，婦人相談所や婦人保護施設，子どもシェルター等の関係施設とも十分

連携する必要性が示されている。そのため，女性野宿者は男性と比べて福祉施設に滞在する傾向があるといえるが，野宿から脱出したり，状況に応じて野宿を続けたりすることを繰り返す女性は少数ながら存在している。

野宿生活者の平均年齢は61.5歳（厚生労働省，2018）であり，年々，平均年齢は高くなっている。エリクソンの発達段階をみると，この時期は子育てが終わり，退職して余生を過ごす時期であり，自己の人生を受け入れて，円滑な人間関係を維持したり，趣味・ライフワークを心の底から楽しんだりすることができる。しかし，人によっては役割の喪失感や，新たな親の介護役割のストレスなどから中年期の危機に苛まれる場合もみられる。女性のライフサイクルでみると，この時期は更年期から初老期の発達段階にあり，身体的特徴には，エストロゲン作用の欠落による更年期障害や骨代謝，心血管系，脂質代謝，脳神経系など全身の機能系に様々な影響をもたらして，QOLの低下が懸念される時期である。わが国の女性の平均寿命は世界最長の状況であり，QOLを保持した更年期から初老期女性の健康管理は重要なものになってきている。

最近の傾向では，経済状況を反映して20～30代の若者層の野宿生活者がみられるようになってきている（湯浅，2006）。しかし，路上で若者層の野宿生活者を見かけることは少なく，路上よりネットカフェ，漫画喫茶や風俗店など終夜営業店舗で過ごすことを選ぶ傾向にあり，不可視化された存在であるとされている。若者層である女性は，他者との親密性を深めて家族を形成する時期に該当し，親役割への適応が課題となる時期である。

これらのことから，女性の野宿生活者が主体的に健康に取り組むためのケアを充実させていくためには，身体的・心理的・社会的側面への支援を行わなければならない。現在までの研究で明らかにされている実態や課題の具体的内容を整理し，課題を明らかにしてゆくことが必要である。そこで本研究では，その実態と課題を把握すると共に野宿生活者が主体的に健康に取り組むための支援に繋げていくため，2001年から2015年の野宿生活者に関する国内文献の内容を分析し，今後の課題を検討する。

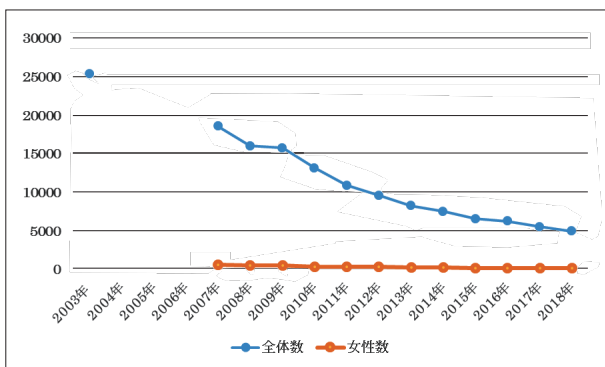


図1. 全国ホームレス人数の推移

2004～2006年は調査なし
厚生労働省「ホームレスの実態に関する全国調査」より作成

II. 研究目的

実際に行われている野宿生活者への支援について文献検討を行い、特に女性野宿生活者に焦点をあてて、支援の現状と課題を明らかにする。

III. 用語の定義

1. 野宿生活者：特措法において、「ホームレス」とは、都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所とし、日常生活を営んでいる者をいう。厚生労働省は、2000年の「ホームレス問題連絡会議」で野宿者の「呼び方」を統一することをめざした。現在では、「ホームレス」、「野宿生活者」、「路上生活者」等が主に使用されている。
2. 親準備性：「情緒的・態度的・知識的に親の役割を果たすために十分な準備ができていないか」「心理的準備状態に限らず、行動面・身体面など育児行動を行うために必要な資質を形成している、あるいは形成された状態」をいう（岡本、2006）。

IV. 研究方法

1. 分析方法

分析対象とした文献は、医学中央雑誌Web版Version 5を用い、2000年1月から2015年3月までの国内医療系

雑誌を中心に「野宿生活者」and「ホームレス」and「路上生活者」and「ケア」and「原著論文、会議録除く」のキーワードを用いて検索を行った結果、10文献を得た。

さらに「野宿生活者」and「ホームレス」and「路上生活者」and「女性」and「原著論文、会議録含む」and「ネットカフェ」のキーワードを用いて検索を行った結果、12文献を得た。あわせて22文献を分析対象とした。

分析対象となった論文22編の掲載年は、2002年3件、2003年1件、2004年1件、2005年4件、2006年2件、2007年2件、2008年2件、2009年2件、2010年1件、2011年1件、2013年1件、2014年2件であった。

V. 結果

1. 野宿生活者の概要（表1）

野宿生活者の平均年齢は、2001-2015年間で約2歳の上昇がみられ、60歳以上の人の割合が多くなってきている（金沢、2009）。野宿生活者の野宿生活期間は、3年以上が60%（朝比奈、2005）、5年以上41.4%（黒田、2008）で、野宿生活期間は長期化傾向にある。居住場所は、公園、河川敷（藤田、2007）、簡易宿泊所、サウナ（神楽岡澄、2004）、簡易宿泊所が30%、シェルターが20%（佐々木、2009）を占めている。仕事をしている者は70.4%。内訳は廃品回収75.5%が最も多く（黒田、2008）土木などの日雇い労働が57.4%（佐々木、2009）、空き缶回収23%（杉野、2008）で、50%が月1万～3万

表1. 2001年から2015年間の野宿生活者に関する文献

著者名・発行年	表題	対象者・研究方法・結果
沼田久美子ら (2002)	新宿区の結核患者における治療中断の関連要因とDirectly Observed Therapyの意義	1996～1999年の4年間での新宿区新登録の日本人結核患者（772人）の特徴を検討。治療成功者（474人）と比べた治療中断者（57人）の特徴は、婚姻状態が死別・離別、一人暮らし、呼吸器症状あり、1日に3合以上の飲酒、ホームレス、入院期間が2ヵ月未満などであった。ホームレスについては、入院期間で顕著な違いが認められ、6ヵ月以上の入院での治療中断の割合は少なく、30歳未満ではすべてが治療中断となっていた。対面服薬支援（DOT）を基本として、「支援し合う人間関係」を患者個々のニーズに合わせ、広く、様々な社会資源を活用して作って行くことが重要。
清水裕子ら (2002)	〈ミジメ〉と〈ホコリ〉のはざ間で生きる人々 山谷でのフィールドワークから	バブル崩壊から始まった不況により、都市の公園や路上にはホームレス（路上生活者）が増え、彼らに対する世間の目は厳しく、「働かずして食っている」「汚い、不潔」といわれる。彼らに対する否定的なイメージは簡単には払拭できず、私達看護職者は、病院などで偏見による誤ったイメージで彼らを扱ってしまう危険性がある。本論文の目的は、東京の山谷地区に住むホームレスの日々の生活を報告することである。山谷に暮らす人々は今や殆どが高齢の単身男性である。本質は何か、事実はどうであるか、物事を探求していこうという姿勢が偏見を軽減し、彼らの事実を知ることが大切。
山本弘庫ら (2003)	DOTS対象者の治療成績および背景の検討	平成11年度から14年度までの寿地区DOTS登録患者で、登録時喀痰塗抹陽性患者59例を対象として、発見時の状況、治療成績、登録時の喀痰塗抹検査結果、また中断した場合には治療中断理由等を調査検討した。59例中48例が治癒し、治療完了率は81.4%であった。治療失敗群の11例中7例が登録時喀痰塗抹で排菌量が多かった。ホームレスは生活保護受給者らと比較して、重症結核となつてからの発見率が高いことが明らかになる。

著者名・発行年	表 題	対象者・研究方法・結果
鈴木陽子ら (2005)	結核に罹患した「ホームレス」への保健師による健康支援活動の視点と関わり方 横浜市T区で働く保健師の事例から	結核に罹患した「ホームレス」への保健師の臨床技術と健康支援活動を明らかにすることを目的とした。横浜市T区のホームレスを研究対象とし、2002年1月～2004年12月に実施した、結核に罹患した「ホームレス」6名（男性、30代前半～60代前半）を対象とした健康支援活動、および無料低額宿泊所の結核検診についての記録を分析した。その結果、保健師の健康支援活動の局面を示すカテゴリーとして、〈検診の機会を生かす〉〈当事者の場所を訪ねる〉〈当事者の医療機関受診に同行する〉〈当事者の“住まい”への思いを大事にする〉〈当事者の力をつける〉の5つのカテゴリーが抽出された。
木下節子ら (2007)	3 駅周辺の不特定多数利用施設を中心とした結核感染—都市結核問題の観点より	目的は、都市における結核発病の実態を報告し、今日の都市結核対策を検討する。方法は、2005年から2006年川崎市における結核症例研究。9 例中3 例がホームレス者。ネットカフェを宿泊に利用していた。結果は、2005年2 月よりの1 年5 カ月間に、川崎市川崎駅周辺の約500m四方の地域で9 例の結核発病を確認した。本事例はネットカフェ等の不特定多数利用施設を中心とした感染と考えられた。都市にはこのような施設が多く、結核未感染の若年者層と結核ハイリスク層とが閉鎖的空間を長時間共有する環境は、いったん結核菌の喀出があれば、容易に感染が起こりうる。
米倉亜由美ら (2009)	退院後の生活の場が確定していない結核患者への退院支援	結核罹患状況は、高齢化の進行・ハイリスク者（ホームレス、日雇い労働者、無職、生活保護受給者など社会的経済的弱者）の増加があるといわれている。当結核病棟においても、置かれている生活や経済面で高いリスクをもって入院をしている患者が多い。結核菌の陰性化を図るとともに、退院後の住所を決め生活を安定させることは再発防止・治療完遂につながる。
松井達也 (2011)	アルコール症を持つホームレスに対する支援 文献検討	本研究の目的はアルコール症を持つホームレスに対する支援に関する文献検討を行い、彼らの支援についての示唆を得ることである。アルコール症を持つホームレスに対する支援に関する国内文献10編と国外文献42編の文献検討を行った結果、ホームレスであることとアルコール症は大いに関連があり、ホームレスのアルコール症を解決するためには入所施設での集中的なプログラムと退院後の地域での医療的支援と居住の確保が重要であることがわかった。さらに国内におけるアルコール症を持つホームレスに対する支援は不十分であり、特に地域でいかに医療的支援を行うかが課題である。
酒井康江 (2013)	文献からみるホームレス支援の現状と課題	国内のホームレス者および生活困窮者支援に関する研究動向、今後の課題を明らかにした。2011年10月の時点において2001年から2011年迄の過去10年間の文献を対象に医学中央雑誌Web・CINAHLを使用し、文献を検索した。「ホームレス」「路上生活者」「生活困窮者」を検索ワードとし、さらに、「看護」で絞り込み検索を行った。医学中央雑誌からは27編、CINAHLからは13編の文献が抽出された。ホームレス者の健康上の問題が深刻かつ多岐にわたっている。
柏木秀雄ら (2014)	住所不定者（ホームレス）の肺結核治療の経験	平成13年から平成15年の間に、住所不定者（ホームレス）肺結核8 例を、感染症病棟にて入院治療を行った。全例男性で、48～57歳、就労可能であった。半数以上は就労意欲があり、住居が確保されれば就労が可能になると考えられた。
田中 勤ら (2014)	深夜の街における少年に関する記述疫学研究	少年たちの生の声、あるがままの姿を把握し、社会に伝える作業は重要である。調査は、深夜の街にやってくる少年たちに、家庭・学校・友人、あるいは夜の街とのかかわりなど、どのような社会環境要因が存在しているのかを記述疫学的手法により明らかにしていくことを目的とする。男女少年（20歳未満）を対象に、記述疫学の方法による聴き取り調査。それぞれの発達段階の少年たちにとっての成長発達権や少年自身の意見表面権、少年にとっての「最善の利益」を尊重し、その利益にかなう個別的アプローチが、思春期少年のサポートに要求されると思われる。

円（藤田，2007）の収入であることが報告されている。若者の路上生活は、その期間が半数以上で6 カ月未満となっており、中高年のホームレスに比べると、比較的短い傾向にある。約40%の者が抑うつ状態にあり、その程度はさまざまだが、路上生活が長くなるほど孤独や疎外感にさいなまれ抑うつ傾向は強まっている。

結婚歴については、「未婚」が70%（杉野，2008）で、単身が多くを占めている。

野宿生活者は、厳しい生活環境下でさまざまな健康問題を抱えて生活しており、主要な健康問題として結核やアルコール問題の研究が7 件と多く挙げられていた。わが国の結核罹患率は戦後急速に減少し、現在に至ってい

るが、野宿生活者の罹患率は高く、ネットカフェなど不特定多数利用施設での集団感染例が報告されており、予防や支援に関心が向けられていることがわかる（沼田, 2002）。アルコール症の割合は国内では10～20%認められ、背景については、日雇い仕事による生活の不安定さなどが挙げられている。支援は不十分であり、特に地域でいかに医療的支援を行うかが課題である（松井,

2011）。

2. 女性の野宿生活者に関する実態（表2）

女性の野宿生活者に関する内容は、表2に示すように12の文献から抽出した。女性野宿生活者の割合は3%（佐々木, 2009）あるいは6%（小橋元, 2002）、または地方によっては20%を占めることもある（下村,

表2. 女性の野宿生活者に関する実態

著者名・発行年	表題	対象者・研究方法・結果
小橋元ら (2002)	札幌駅周辺のホームレス者の生活状態と支援ニーズ	今回の調査対象者は男性が46人、女性3人（6%）で女性は少ないが男性に比べて健康面、安全面の問題が大きく、その実態把握と対策は今後の課題と考えられる。
知覧俊郎 (2004)	日雇い労働者・ホームレスたちの今	山谷。女性や子連れのホームレスも目立つようになった。
中沢裕里 (2005)	当院の周産期における社会的ハイリスクケース	社会的ハイリスクケース「家族の問題」「不法滞在」「セルフケア能力の低下」例えば飲酒など社会的ハイリスクケースについてアディクション看護の必要性を述べている。
丸山里美 (2005)	野宿者の抵抗と主体性：女性野宿者の日常の実践から	ある公園と施設において行った調査に基づいて、女性野宿者の生活世界に焦点をあてるものである。野宿者の中で女性の割合は2.9%にすぎず、従来の研究では女性はほとんど存在しないものとされてきた。しかし彼女たちの実践から見えてくるのは、男性野宿者の場合とは異なる、ジェンダー化された女性野宿者の世界である。さらに彼女たちに特徴的に見られたのは、周囲との関係性に拠りながら、状況に応じて野宿を続けたり、野宿から脱出することを繰り返す姿だ。
北村菜穂子 (2005)	女性はどのようにホームレスになるのか	ホームレス女性の個別プロセスを「母子関係の希薄さ」、「行為嗜癖・関係嗜癖」、「サバイバー体験」、「心身の安全な場所」という4つのキーワードで分析した。分析の結果、母子関係の希薄さ、親との関係について自分の中で消化しきれていなく、自分が母から大切にされているメッセージを受け取っていないことが確認された。ホームレス問題は、単に失業や病気など個人的な問題や失業などが原因であるだけでなく、人間関係が深く影響をする嗜癖問題ととらえることができる。ホームレス女性たちが嗜癖問題を抱える存在と認識し、その課題に対するサポートが整備される必要がある。心身の安全な場の確保、女性たちが駆け込める場の整備とその情報提供が重要。
湯浅 誠 (2006)	「現代の貧困と若者たち」	35歳の女性のうつ。身体的な問題があり労働時間が短く家賃が払えない。追い出しを通告された。20～30代の若者たちの相談が増えてきている。20～30代の居場所作りが必要。DV、母子、障害者支援などと貧困問題は横の関係でつながって問題を表に出していかなければならない。
渡邊由美他 (2006)	平成16年度社会的養護を要する人々への援助ケース3例	ホームレス生活という生活基盤が形成されていないまま不安定な状態で出産をすることは身体的精神的にもかなりのストレスがかかっていたと思われる。
末盛 慶 (2007)	日本における健康格差	社会経済的地位によって受診行動に差がある。女性においても200万未満であると検診未受診の割合は25%だが400万円以上だと20.1%になる。
宮下忠子 (2008)	女性ホームレスの健康問題と対策	センターの相談室には婦人相談員が区から出張していたが、女性の相談来院者が減少し、婦人相談員の出張は閉じられた。山谷地域における女性問題は実は多くの男性達の陰に見えなくなっている。
下村幸仁 (2008)	地方の路上生活者の実態と支援活動	地方では、女性の出現率が高く、全体の2割を占める。
笹田琴美 (2009)	女性への暴力：夫・恋人からの暴力	女性への暴力の実態は、女性の3人に1人の割合で配偶者からの被害体験がある。女性や子どものホームレスには背景に暴力が潜むケースが多いことを念頭におく必要がある。貧困の中で暴力被害を受け、病気や知的・精神的障害等があり、自立が困難な女性たちにとって安全な環境で長期的な保護と支援を受けられる場合は常用な選択肢となる。それが可能な社会資源として婦人保護施設が果たす役割は大きい。

著者名・発行年	表 題	対象者・研究方法・結果
水主川純 (2010)	妊婦健康診査未受診妊婦に関する問題点とその対応策	未受診妊婦の背景、母児の周産期事象について検討。未受診であった理由は、経済的困窮が24例(72.7%)と最多。自宅を有さない者は16例。生活拠点は、友人宅8例、ネットカフェ4例、従業員寮2例、路上2例。離婚歴を有さない未入籍症例は全例が初産婦。妊婦・出産に関する知識が乏しく経済的困窮のために受診を躊躇。相手と同居中の妊婦は、2人では経済的困窮の解決策を見出せず、受診の機会を逸していた。経済的困窮が未受診の主たる要因である場合は、適切な助言者と相談する機会を得て、家族や行政機関による支援を受けることで妊婦健診未受診という事態を回避できる可能性がある。

2008)。年齢は50歳以上が80%を占める(北村, 2005)が、20~30代の若者たちの女性や子連れホームレスも目立つようになったことが報告されている。生活基盤が形成されないまま不安定な状態で出産に至った報告が挙げられ、家族や行政機関による支援を受けることや、女性が妊娠や出産に関して責任ある自己決定ができるような教育の重要性や、妊婦自身が周囲に相談する環境づくりなどきめ細かな提言が多い(渡邊他, 2006; 水主川, 2010)。

女性への暴力の実態が明らかにされており、野宿生活者女性の3人に1人の割合で配偶者からのDV被害体験が報告されている。女性や子どものホームレスには背景に暴力が潜んでいる可能性を念頭におくことが示され(笹田, 2009)、女性野宿者は、まさに“生き延びた人(サバイバー)”という表現があてはまる存在である(北村, 2005)。彼女たちは危険な状況から離脱を果たし、いきついた場所で新たな人間関係の修復を求めているのである(北村, 2005)。女性の問題は少数であるが確実に存在し、男性達の陰に見えなくなっているだけだと述べられている(宮下, 2008)。

妊婦健康診査未受診妊婦に関する報告では(水主川, 2010) 35例中16例が自宅を有しておらず、それらの生活拠点は友人宅8例、インターネットカフェ5例、従業員寮、路上が各2例であった。未受診の理由は、経済的困窮が24例と最多であった。

VI. 考察

以上の文献から明らかになった女性野宿生活者の実態を踏まえ、「背景に潜む暴力」、「親との関係性の希薄」、「母児の周産期事象に関する課題」について、今後の看護援助につなげるために考察する。

1. 背景に潜む暴力

1979年「女性差別撤廃条約」が国連で採択され、日本においても「男女共同参画」社会に向けていろいろな取り組みがなされている。しかしながら、女性差別はまだまだ払拭されていないのではないかと考える。笹田(2009)は、女性への暴力の実態は、女性の3人に1人の割合で配偶者からの被害体験があり、女性や子どもの

ホームレスには背景に暴力(DV)が潜むケースが多いことを念頭におく必要があると述べている。女性野宿者は、危機的状況を自から逃げてきてホームレスに至った背景には、DVの問題も含まれている可能性があるということである。DVは、パワーとコントロールの関係、つまり支配する側と従属させられる側が常に代わらず、相手を自分が思うように支配することは当たり前のことであると信じ、支配するために振られる心身に対する暴力的、威圧的等の言動のことである。このような人権を侵害された女性達の支援には、安全な場所を求めるために切実な行動として、逃避、路上生活、野宿生活を選択することもあることを理解することが大切であり、女性達が駆け込める場所の整備と当事者の意思決定を尊重し、そのための助言や情報を提供することが求められる(北村, 2005)。

湯浅(2006)は、DV、母子、障害者支援などと貧困問題は横の関係でつながっていて、問題を表に出していかなければならないと述べている。貧困の中で暴力被害を受け野宿生活を余儀なくされた女性の支援には、大きく細やかな力が必要であり、社会資源として婦人保護施設が果たす役割は大きい(北村, 2005)としている。しかしながら、居場所を見失っている若い女性たちが婦人保護施設等の支援にはなかなかつなげていきにくい現状にある。都道府県や市町村においては、DV防止及び被害者の保護に関する基本計画を踏まえて、配偶者暴力支援センターやシェルターを設置して、支援にたどり着けるように努めているとしている。支援が届いているのかについては、今後、検討していく必要があると考えられる。

野宿生活者に対しては、近年、人権擁護としてのアドボカシーの必要性が問われている。アドボカシーとは、ある人の味方になって、その権利や利益を守るために闘うことであり、アドボカシーの理念に基づき多くの個人や民間支援団体が活動している。白井ら(2016)は、野宿生活者が「野宿」から「社会」に戻ることを目指した看護支援活動をアボゲイトとして展開している。アボゲイトが積極的に活かされる制度も今後検討していく必要があると考える。

なお、2002年の「ホームレスの自立支援等に関する特

別措置法」は、自立の支援等に関する施策の目標を明示したもので、8月7日に公布、施行され、10年で効力を失うものとされた。しかし、2017年には第193回国会において平成39年8月6日までの10年間の延長が決定している。今後、より必要な措置が講ぜられることを期待したい。

2. 親との関係性の希薄

近年のわが国においては、少子化・核家族化などにより、育児行動の観察や体験など養育や育児について学習する機会を得ることがないまま、親になる傾向が強い（佐々木、2010）。中高校の教育においては学習指導要領に明文化され、各学校の状況に応じた取り組みがなされているがその後の学習機会は少ないのが現状である。青年期は、近い将来親になるための発達段階として、「親性」を高めるための重要な準備期間であり、次世代のいのちを育む大切な存在である。今回の文献報告に見られたように「母子関係の希薄さ、親との関係について自分の中で消化しきれていなく、自分が母から大切にされているメッセージを受け取っていないこと」（北村、2005）や「妊婦・出産に関する知識が乏しい」（水主川、2010）ことで不安になることが多く、親になる自らの成長を支援するためにも、学習のシステムが必要と考えられる。また、子どもにとっては健全な人間関係を示す大人の存在が大切である。子どもにかかわる親自身の健全さが育成されるようなシステム作りが大切であると考えられる。北村（2005）も述べているように、いわば家族機能不全の家族による世代間伝播を断ち切るサポート体制が大切である。母子関係の希薄さに悩む母と子の支援が求められている。

一方、援助者側の学習をすすめることも大切であると考えられる。援助者と非援助者の等価性について理解を深め、援助システムを構築することが重要であろう。思春期から青年期は、近い将来親になるための発達段階として、「親性」を獲得するための働きかけを行うには大切な時期であると考えられる。また、暴力による関係性に依存しないためにも、この時期への教育支援の必要性が示唆される。

3. 母児の周産期事象に関する課題

毎日のようにニュースで「孤立出産」、「胎児遺棄」事件の報道を見聞きする。2018年6月には漫画喫茶の女子トイレ内にて出産したという、痛ましい事件が発生している。同じように女子トイレ内で出産した女性は、近くのゲームセンターの2階の用具庫に胎児を遺棄し、「家も金もないので邪魔になって捨てた」としている。授かった尊い命を何とかして助けることができなかつたのかと報道を聞いた多くの大人は胸を痛め、悔しい思いをしたのではないだろうか。

水主川（2010）論文による「妊婦健康診査未受診妊婦に関する問題点とその対応策」には、その実態調査による実態がつぶさに記されており、困難を抱える若者の状況が見えてくる。調査で明らかになっているように、妊婦健康診査未受診妊婦は、若年層で、貧困、虐待、暴力の連鎖の中で出現している困難と重なっている可能性がある。生活環境調整や児の養育意思が乏しいまま妊娠した者など事例に応じた支援が必要であると考えられる。

また、安全な妊娠・出産、児の適切な育児環境を確保するために、家庭、学校、地域社会も連携し、取り組むことの重要性も示唆している。子どもが心を開いて学べる柔らかな発想の教育サポートを提案していきたい。

VII. 結論

女性を支える看護実践を考えるための支援の現状と課題は以下のとおりである。

1. 女性野宿者は、2018年は177人、野宿生活者全体の3.6%であった。20～30代の若者層の野宿生活者がみられるようになってきているが、路上よりネットカフェ、漫画喫茶や風俗店など終夜営業店舗で過ごすことを選ぶ傾向にあり、不可視化された存在である。
2. 女性への暴力の実態が明らかにされており、野宿生活者女性の3人に1人の割合で配偶者からのDV被害体験が報告されている。
3. 女性達が駆け込める場所の整備と当事者の意思決定を尊重し、そのための助言や情報を提供することが求められる。かつ、支援が届いているのか検討することが必要である。
4. 少子化・核家族化などにより、育児行動の観察や体験など養育や育児について学習する機会を得ることがないまま、親になる傾向が強くなり、親としての役割を果たすためには、親準備支援システムをどのように整えればよいのかを検討する必要がある。
5. 安全な妊娠・出産、児の適切な育児環境を確保するために、家庭、学校、地域社会も連携し、取り組むことが重要である。

※本研究は、科研基金による平成27-30年度研究助成（研究課題：野宿生活者が「野宿」から「社会」に戻ることを目指した看護支援、代表研究者・白井裕子）による支援を受けた研究の成果の一編である。

文献

朝比奈朋子（2005）、見えるDV・見えないDV ジェンダー文化と暴力、淑徳大学大学院研究紀要、12、325-329。

- 柏木秀雄, 樋口治之, 奥田喜朗 (2014), 住所不定者 (ホームレス) の肺結核治療の経験, *Progress in Medicine*, 34 (6), 1133-1139.
- 木下節子, 大森正子, 塚本和秀 (2007), 駅周辺の不特定多数利用施設を中心とした結核感染 都市結核問題の観点より, *結核*82 (10), 749-757.
- 北村菜穂子 (2005), 女性はどのようにホームレスになるのか, *保健医療科学* 54 (3), 248-249.
- 厚生労働省HP, ホームレスの実態に関する全国調査 (概数調査) 結果 <https://www.mhlw.go.jp/content/12003000/000330962.pdf>, 2018. 9. 20アクセス.
- 小橋元 (2002), 札幌駅周辺のホームレス者の生活状態と支援ニーズ 平成12年12月の炊き出し会場における聞き取り調査より, *社会医学研究*, 20, 15-22.
- 北川由紀彦 (2010), 「〈ホームレス〉と社会的排除 制度・施策との関連に注目して」, *理論と動態*, 3, 71-86.
- 宮下忠子 (2008), ホームレスをもっと知るために 女性ホームレスの健康問題と対策 彼女たちに寄り添い続けた体験から *Journal of Integrated Medicine* 18 (4), 314-315.
- 松井達也 (2013), ホームレスの健康調査とアルコール問題, *文献検討太成学院大学紀要*, (15), 127-136.
- 沼田久美子, 藤田利治 (2002), 新宿区の結核患者における治療中断の関連要因とDirectly Observed Therapyの意義, *日本公衆衛生雑誌* 49 (1), 58-63.
- 岡本祐子 (2006), 発達臨床心理学から見た「親になれない親」の理解と援助, *母性衛生* (46), 480-483.
- 篠原清夫, 松本浩幸 (2014), A看護大学生の精神障害者とホームレスに対するイメージの比較, *三育学院大学紀要*, 6 (1), 63-72.
- 酒井康江 (2013), 文献からみるホームレス支援の現状と課題, *福岡女学院看護大学紀要*, 3, 43-48.
- 鈴木陽子, 山崎喜比古 (2005), 結核に罹患した「ホームレス」への保健師による健康支援活動の視点と関わり方 横浜市T区で働く保健師の事例から, *社会医学研究* (23), 75-82.
- 清水裕子, 高橋美香子, 羽山由美子 (2002), 〈ミジメ〉と〈ホコリ〉のはざ間で生きる人々 山谷でのフィールドワークから, *聖路加看護学会誌* 6 (1), 58-64.
- 笹田琴美 (2009), 女性への暴力 夫・恋人からの暴力, *公衆衛生* 73 (9), 651-654.
- 産経ニュース <https://www.sankei.com/affairs/news/180602/afr1806020006-n1.html>, 2018.9.20アクセス.
- 白井裕子, 佐々木裕子, 井上清美 (2016), 野宿生活者が「野宿」から「社会」に戻ることを目指した看護支援, *科研実施報告書*.
- 佐々木綾子, 小坂浩隆, 末原紀美代他. 親性育成のための基礎研究 (1) - 青年期男女における乳幼児との継続接触体験の心理・生理・脳科学的指標による評価 - : *母性衛生*, 51 (2), 291-300 (2010).
- 田中勤, 古橋忠晃, 藪下ももこ (2014), 深夜の街における少年に関する記述疫学研究, *思春期学* 32 (3), 334-344.
- 米倉亜由美, 石岡律子, 塚本有紀 (2009), 退院後の生活の場が確定していない結核患者への退院支援, *化学療法研究所紀要* (39), 70-76.
- 山本弘庫, 真島千寿子, 菅野美穂 (2003), DOTS対象者の治療成績及び背景の検討, *保健師・看護師の結核展望*, 41 (2), 53-57.
- 湯浅誠 (2006), 「生活困窮フリーターたちの『賃金と社会保障』」, *賃金と社会保障*, 21-32.
- 渡邊由美 (2006), 平成16年度社会的援護を要する人々への援助ケース 3 例, *大阪府済生会中津病院年報*, 16 (2), 248-252.